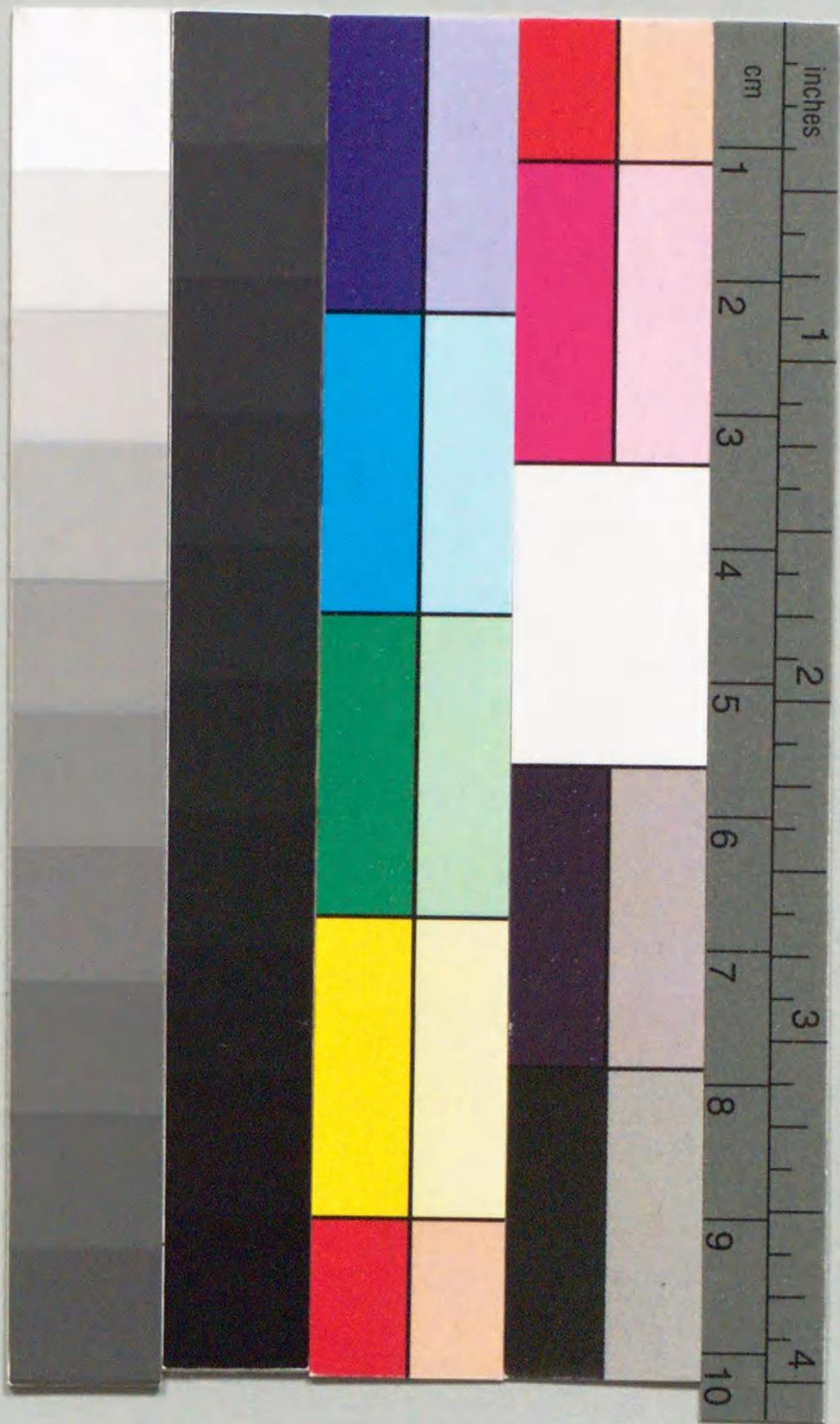


啓蒙日本外史

十二

特  
2649





啓蒙日本外史卷十二

足利氏正記

足利氏二

東陽大槻誠之  
益軒渡邊約郎校



正平七年八月ヨシアキソウクワ義詮崇光帝北朝ノ天子太弟後光ヲ立ツ初  
光明帝ノ立ツヤ後醍醐天皇偽器ヲ以テ之ニ授不  
月ノ吾天涼師ヲ襲ヒ北朝ノ二上皇一帝ヲ虜ニス  
二其器又毀ツ是ニ於テ公卿劍璽ナクシテ位ニ即ク  
ノ不可ヲ議ス、關白藤原良基ヨシモト曰ク、尊氏ヲ劍ト為シ、良  
基モトヲ璽ジト為ス、何ゾ不可ナラント、遂ニ立ツ、是ゴ後光

啓蒙日本外史 卷十二 足利氏 一 可不成言哉



山名氏 起本利

嚴院ト為<sub>レ</sub>是時ニ當テ政義詮ニ在リ、義詮、佐々木道  
譽ヲ寵ス、道譽ハ即チ高氏信綱五世ノ孫ナリ、初メ尊  
氏ヲ勸メテ北條氏ヲ滅シ、數々新田氏ヲ困マシム、直  
義直冬叛クニ及ブトキ、為メニ志ヲ變ゼズ、屢々義詮  
ノ危キヲ拯フ、故ヲ以テ寵幸セラレテ事ヲ用ユ、子ノ  
秀綱、弟ノ氏賴等、ミナ親信セラル、山名時氏功ヲ負ヒ、  
邑ヲ若狹ニ得ント欲シ、子ノ師義ヲシテ道譽ニ就テ  
之ヲ請ハシメテ曰ク、將軍ノ約スル所ナリト、道譽方  
ニ宴シテ顧ミズ、師義立テ日暮ニ至ル、乃チ念テ曰ク、  
我寧ゾ汝ヲ須ニヤト、馳セテ伯耆ニ歸リ、時氏ト俱ニ

特 254

佐々木 網死 戦

官軍ニ應ズ、吉良満貞石堂頼房、嘗テ直義ニ黨ス、赤松  
氏範兄ノ則祐ト惡シ、皆起テ之ニ應ズ、八年六月、同時  
ニ京師ニ入ル、義詮、北帝後光嚴院ヲ叡山ニ移シ、而シテ自  
ラ鴨河カモガハノ東ニ陣ス、道譽先敗ス、細川清氏獨リ止リテ  
戦フ、義詮之ヲ召シ還ス、已ニシテ山徒又欸ヲ敵ニ通  
ズ、書ヲ送テ以テ情實、義詮近江ニ走ル、新田氏ノ餘黨、  
堀口貞祐ドコウ土寇コウ草野ノヲ率中テ要シ撃ツ、秀綱之ニ死  
ス、行テ鹽津シホ江ニ至ル、土寇復起ル、兵潰ユ、清氏馬ヲ下  
リテ、北帝ヲ負フテ東ニ走リ、垂氷ニ達ス、尊氏已ニ關  
東ヲ定メ、基氏ヲ留メテ之ヲ鎮セシム、佐々木ニ畠山

東ヲ定メ、基氏ヲ留メテ之ヲ鎮セシム、佐々木ニ畠山



足利高經 斬刀

國清ヲ以ス、而シテ西義詮ト遇テ、與ニ共ニ京師ニ入  
 ル、而ノ山名時氏ノ兵日ニ逃<sup>ホロ</sup>レ亡<sup>ホロ</sup>ズ、走テ伯耆ニ歸ル時  
 氏乃曰ク、衆ノ我ニ歸セザル、我其由ヲ知ルナリト、乃  
 チ直冬ヲ索ム、直冬ハ直義死シテヨリ長門ニ匿ル、是  
 ニ於テ時氏之ヲ擁戴ス、歸スル者果シテ多シ、足利高  
 經、桃井直常、之ヲ來テ欸<sup>モリタム</sup>ヲ送ル、高經ノ新田義貞ニ克  
 ツヤ<sup>越前金崎</sup>、其二刀ヲ得ル、尊氏之ヲ取ント欲シテ  
 曰ク、源氏ノ寶ナリ、宜ク之ヲ宗家ニ傳フベシト、高經  
 之ヲ斬ス<sup>キ</sup>、吝<sup>オシ</sup>ンデ與<sup>アズム</sup>給イテ曰ク、嚮<sup>ホシキ</sup>ニ長崎道場ニ託<sup>タク</sup>シ  
 テ災ニ罹<sup>カ</sup>ルト、他ノ刀ノ二ヲ取り、焼テ之ヲ獻ズ、尊氏  
 ニ<sup>ホシ</sup>

直冬高經 尊氏

怒テ高經ヲ擯<sup>ヒンセキ</sup>斥<sup>シ</sup>ス、高經怨望<sup>エンボウ</sup>シテ、終ニ直冬ニ歸ス、九  
 年冬、直冬等並ビ起リテ東京師ヲ攻ム、義詮、道譽ト、出  
 デ、播磨ニ拒<sup>フセ</sup>グ、明年正月、直冬、時氏<sup>山名</sup>丹波ヨリ入ル、  
 仁木頼章<sup>ニツキヨリアキラ</sup>新タニ執事<sup>シツジ</sup>、足利氏ノト為ル、敢テ要<sup>モトメ</sup>シ、擊<sup>ウ</sup>タ  
 ズ、尊氏<sup>オホシ</sup>駕ヲ奉ジテ近江ニ走ル、六角氏<sup>ロクカクウシヨリ</sup>頼仁、木義長等、  
 來テ之ヲ援<sup>オモシ</sup>ク、而シテ細川頼之、四國ノ兵ヲ以テ入テ  
 援ク、頼之ハ頼春ノ子ナリ、是ニ於テ義詮、神南山<sup>カウナイヤン</sup>、山  
 陣ス、時氏<sup>モロ</sup>師義<sup>山名</sup>父子楠氏ノ兵ト還テ神南山ヲ攻ム、諸  
 將拒ギ、戰テ大ニ敗ス、師義四目ノ旗號<sup>キゴウ</sup>ヲ觀テ曰ク、彼  
 レ道譽ニ非ザルカト、卒ヲ麾<sup>サシマネ</sup>イテ逼<sup>セマ</sup>リ、擊<sup>ウ</sup>ツ、赤松則祐<sup>アカスネノスケ</sup>



三上皇還野吉

則祐弟ノ氏範ト相ヒ惣シ、故義詮ニ侍ス、騎兵ヲ呼デ  
ニ兄弟分レテ南北ニ附ス  
之ヲ勗メシム、高キニ憑テ馳セ下ル、師義傷ヲ被リテ  
走ル、尊氏叡山ニ在テ神南ノ捷ヲ聞キ、進デ東山ニ陣  
ス、義長清氏ヲ遣ハシ、高経直常ト戦ハシム、終ニ直冬  
ヲ東寺ニ攻ム、義詮山崎ニ軍シ、頼章嵐山ニ軍シテ其  
糧道ヲ絶ツ、直冬遂ニ界浦泉和ニ走リ、戦ヲ八幡廟ニト  
ス、巫ノ曰ク、神意父ニ抗ルナリスル者ヲ右ケズト、諸  
將乃チ解キ去ル、巫言ヲ聞テ兵尊氏駕ヲ迎ヘテ京師  
ニ歸ル、三上皇光嚴上皇、光明上皇モ亦吉野ヨリ至ル、十三  
年四月、尊氏癰ヲ患ヘテ薨ズ、京師衣笠山ニ葬ル、等持院ト号ス、康正三年、太政

尊氏薨

菊池武光敗色直氏

大臣ト年五十四ナリ、北朝、従一位左大臣ヲ贈ス、義詮  
贈官ス、ト年五十四ナリ、北朝、従一位左大臣ヲ贈ス、義詮  
ヲ以テ征夷大將軍ヲ襲ハシム、基氏ヲ左馬頭ト為ス、  
官軍、足利氏ノ喪ニ乗ジテ、所在並ビ起ル、鎮西探題一  
色直氏、菊池武光ノ為メニ敗ラル、義詮、細川繁氏ヲ  
遣シ之ニ代ラシム、繁氏道ニ病テ死ス、少貳頼尚、大友氏  
時、数々武光ヲ撃ツ、而シテ新田義興、鎌倉ヲ襲ハント  
謀ル、基氏、畠山國清ヲシテ誘ナフテ、義興ヲ殺サシメ、  
義興策ニ陷イリ、武蔵基氏親ヲ兵ヲ入間河、武蔵ニ觀ル、  
天口ノ渡シニ沈没ス、關東大ニ伏ス、國清、基氏ニ説テ曰ク、故將軍尊氏世ヲ捐  
テ、天下、両公基氏ノ相忌ムヲ疑フナリ、臣請フ兵ヲ

文家 大下 一 足利二 四 可成善藏



醍醐天皇御紀 卷之十一

畠山國清攻南軍

將中、南吉野ヲ定ムルヲ得テ、以テ新將軍ノ意ヲ解  
カント、勲功ヲ立テ義詮ノ意ヲ釋キ、以テ基氏之ヲ然リ  
トス、八州ノ兵ヲ護シ、國清ニ附シテ西上セシム、十四  
年冬、國清京師ニ入ル、明年正月、義詮諸將ヲ率テ出デ  
テ尼崎アガサキ津ツニ軍ス、國清進シテ筒山ニ軍ス、弟義深ヨシフカヲメ  
別ニ龍門ヲ攻シム、義深敗レ歸ル、又弟義熙ヒロヲシテ代  
リ攻テ之ヲ拔カシム、赤松氏ウヂノリ範約シテ内應ウチノタカ正平八年、  
赤松氏ウヂノリ範、皆ナラ南朝ニ降ル、ヲ為ス、成ラズシテ來奔ス、諸將モ亦三城  
ヲ拔ク、遂ニ楠氏ヲ赤坂ニ攻テ之ヲ走ラス、楠氏村上  
帝ヲ奉ジテ金剛山ニ匿ル、五月、義詮凱旋ガイセンス、捷軍凱風カキイハヒ  
奏カキテカヘル

國清清氏凶義長

シテ旋カ畠山國清ノ京師ニ入ルヤ、仁木義長ノ專横センコウヲ  
ルナリ、視テ深ク之ヲ嫉ム、乃チ密カニ諸將ニ謂テ曰ク、是役  
實ハ義長ヲ圖ルナリ、彼日ニ西宮ニシノミヤ津ツニ陣シテ、義詮、吉  
スニ因テ義長ヲシ、未ダ嘗テ進ミ戰ハズ、足利ノ敗レ  
テ西宮ニ陣セシム、未ダ嘗テ進ミ戰ハズ、足利ノ敗レ  
ヲ聞ケバ、則チ喜ビ、捷カチヲ聞ケバ、則チ憂フ、吾レ請フ諸  
公ニ、從テ姦臣カンシンヲ誅セント、時ニ細川清氏等素リ義長  
ト隙アリ、亦國清ト謀ヲ同フス、七月、楠氏兵ヲ摂津ニ  
出ス、國清、清氏即チ之ニ赴ムキ、義長ヲ返擊ヘンキ戰ヲ返シ  
スルヲ議ス、義長之ヲ聞キ、子弟ヲ遣ハシ、諸路ニ拒ガ  
シメテ、而シテ自カラ兵ヲ以テ義詮ヲ守ル、佐々木道

文章日本外史 卷之十一 足利二 五





石室... 卷之十三... 石室... 石室...

道譽令詮其弟

譽夜潛カニ側門ヨリ入り道譽密謀ヲ献ゼント欲ス  
ラズ義詮ヲ見テ曰ク諸将ノ圖ル所ニシテ諸将義長  
ル將軍之ヲ右クルハ何ヅヤ然シテ諸将ノ意モ亦測  
ル可カラザル也今臣義長ト事ヲ幄外ニ議ス將軍其  
間ヲ以テ出デ西山ニ逃レヨト義詮乃チ疾ヒ作ル  
ト稱シテ寢室ニ就ク義長罷り出ツ義詮ノ弟道譽  
來ルニ會テ與ニ語テ夜半ニ至ル道譽去ル辞シテ  
義長臥内義詮ニ入テ事ヲ白ス答フル者ナシ乃チ  
大ニ之ヲ索ムレ氏得ズ義長ノ兵潰散ス遂ニ走テ  
伊勢ニ歸ル官軍幕府ノ弊レニ乘ジテ並ビ起ル衆罪

楠氏攻殺佐木秀詮

ヲ國清ニ歸ス國清懼レテ東鎌ニ歸ル路義長ノ邑ヲ  
經ル厩カニ免レテ歸ル義長弟義住ヲシテ石堂頼房  
ト葛木山江ニ陣セシム義詮六角氏頼土岐直氏ヲシ  
テ撃テ義住ヲ降サシメ遂ニ義長ヲ討シ義長遂ニ官  
軍ニ降タル十六年山名氏遙カニ義長ニ應ジ攻メテ  
美作ヲ取ル楠氏攻テ摂津ヲ取リ佐々木秀詮ヲ殺ス  
秀詮ハ道譽ノ孫ナリ初メ赤松範資摂津守護タリ之  
ヲ子ノ光範ニ傳ス道譽譖シテ之ヲ奪フ摂津守護ヲ  
又加賀ヲ富樫氏ニ奪ヒ之ヲ其婿斯波氏左衛門予シ  
ト欲ス細川清氏之ヲ延争スルニ因テ乃チ止ム清氏

文... 足利二... 六... 可...



道譽 清氏 生際 妃本

ハ和氏カクの子ナリ時ニ執事タリ赤松則祐モ亦道譽ノ  
女ヲ娶ルメト清氏則祐ノ管内ノ一邑ヲ得テ以テ其戰士  
ヲ賞セント欲ス道譽許サズ清氏嘗テ宴ヲ設ケテ義  
詮ヲ請フセウケイ道譽更ニ高會ヲ為シテコレヲ請フ義詮顧  
リミテ佐々木氏ニ如ク故ヲ以テ兩家相惡シ清氏其  
子ヲ八幡祠ニ冠ス名ヲ八幡ト命ズ源氏ノ故事ナリ  
義詮之ヲ猜フウカ僧ノ善ク禱ル者アリテト名ハ志一鎌倉  
ヨリ来ルニ會フ一日佐々木氏ニ造ルイタ從容トシテ語  
次清氏願書ヲ託スルノ事ニ及ブ道譽其書ヲ索觀シ  
テ復返シ與ヘズ明日袖シテ伊勢氏ニ適キ義詮ニ上オモトメ

義詮 細川 氏

ラント請フ伊勢ハ足利氏ノ傳宣デンセン直ニ稟啓モシマゲルヲ司ドル  
者ナリ伊勢道入其書ヲ視レバ義詮基氏ノ二將ヲ呪シ  
テ自カラ之ニ代ハルナリ伊勢心之ヲ疑ガヒ清氏為  
非ザル未ダ上ラザルナリ義詮偶々疾アリ道譽入テ  
之ヲ視ル問テ曰ク清氏ノ書ヲ見ルヤト義詮曰ク未  
ダナリト伊勢ヲ召シテ上ラシム義詮因テ八幡祠ヲ  
檢シテ又清氏ノ願書ヲ得ルニ前書ト同ジ是ニ於テ  
陰ニ之ヲ誅スルヲ謀ル後チ數日清氏天龍寺ニ詣シ  
多ク甲士ヲ率ユ義詮以テ謀ゴト泄ルト為シ夜遽ニ  
新熊野京城ニ走リ槁ヲ撒シテ守ル清氏大ニ驚キ人

新熊野ノ東ニ走リ槁ヲ撒シテ守ル清氏大ニ驚キ人



源氏物語 卷之十一 伊弉諾命

國清 清氏 降南 軍

ヲシテ其寛ヲ訴ヘンム、義詮答セズ、乃チ其邑若狹一  
帰ル、弟將氏ヲ留メテ、以テ異志ナキヲ明カス、義詮聽  
カズ、十月義詮兵ヲ遣ハシ清氏ヲ討ツ、清氏南ニ走リ、  
石堂頼房ニ因テ官軍ニ降ル、畠山國清モ亦基氏ニ叛  
ク、國清ノ西スルヤ十四年冬京師ニ入ル關東ノ將士亡ゲ帰ル  
者多シ、國清盡ク其邑ヲ収ム、將士連署シテ之ヲ基氏  
ニ訴フ、基氏、國清ヲ誚ム、國清懼レテ伊豆ニ走ル、弟ノ  
義深信濃ニ走ル、並ビニ兵ヲ起シテ官軍ニ應ズ、清氏  
奏ス、足利氏ノ兵、東義長ヲ拒ギ、西時氏ヲ拒グ、臣請フ  
モツシズル其虚ニ乗ジテ京師ヲ克復セント、詔シテ之ヲ許ス、十  
コクフクカチカヘス

清氏 頼房 攻足 利

二月清氏頼房等北上又、諸將敢テ邀ヘ撃タズ、義詮道  
譽ト、北帝後光ヲ挾サンテ近江ニ走ル、義詮ノ子春王  
猶ホ幼ナリ、従者ノ為ニ抱カレテ南禪寺ニ走ル、僧ノ  
良芳之ヲ衣被中ニ匿シ、送テ赤松則祐ニ致ス、則祐之  
ヲ白旗城ニ奉ジテ、兵ヲ引テ入テ援ク、弟氏範ヲ遣ハ  
シ行宮ヲ襲ハシム、姪ノ範實、足利高経等ト、義詮ニ近  
江ニ従フ、凡ソ一萬餘騎ナリ、而シテ清氏ニ附ク者ト  
シ、十七年正月、清氏遁レ去ル、義詮乃チ京師ニ帰ル、初  
メ道譽將ニ走ラントス、其第ヲ洒掃シ、大壺ニ酒ヲ貯  
ヘ、二僧ヲ留メ、誡メテ曰ク、来ル者ハ之ヲ犒ヘト、已ニ

足利ニ 八



道譽 老手 博得 鎧刀

シテ楠正儀来ル、僧迎へテ之ヲ犒フ、清氏其第ヲ毀タ  
ント欲ス、正儀肯ンゼズ、鎧刀ヲ留メテ謝シテ去ル、時  
人稱ス、道譽ノ老手老功、正儀ノ鎧刀ヲ博ヘ得タリ  
ト博ハ貿易ナリ、盡酒ト鎧傳ヘテ以テ笑ヒト為ス、清  
氏讚岐ニ走テ再撃ヲ圖ル、山名師義時氏兵ヲ出シテ  
援ヲ為ス、義詮、細川頼之ニ清氏ヲ撃チ、今川貞世ニ師  
義ヲ撃タシム、師義糧盡テ走ル、清氏弟ノ氏春等ト白  
峰讚岐ニ據ル、官軍ノ將中院氏源山西長尾讚岐ニ據ル、遠  
近競ヒ起テ之ニ應ズ、頼之方ニ備中ニ在リ、七月航ン  
テ歌津讚岐ニ歸リ、先其母ヲ遣ハシ、細川清氏ニ説シメ

頼之 克清 白氏 於峰

テ曰ク、公讒ヲ蒙リテ逃ル、僕其心ヲ亮カニス、然リト  
雖モ、自カラ奮勲ヲ弃テ、親戚ヲ割離スルハ公モ亦何  
ゾ忍ビシヤ、今苟ニ圖ヲ改レバ、則チ公ノ自ラ新ニス  
ルヲ聽キ、義詮其自新ヲ納テ、邑土故ノ如ケシ、僕公ノ  
為ニ之ヲ保セント、清氏問答スルヲ累日、中國ノ兵頼  
之ニ追附シ、来リ附城壘全ク成ル、乃チ清氏ヲ絶ツ、絶  
ナリ、頼之乃チ其將新開直行ヲ召シテ曰ク、彼ハ主我  
ハ客、客ハ速戦ヲ利ス、女ヲ長尾ニ向ヒ、彼ヲシテ兵ヲ  
分タシメテ、潛ニ歸テ吾ト夾サンデ、清氏ヲ攻メン、清  
氏慄悍ヒヨウカン性急ニシテ勇ナリ、獨身輕シク出シ、一戦シテ



清氏 戰没

擒ス可シト、直行乃チ兵五百ヲ以テ行く火ヲ縱テ長尾ニ向フ、清氏曰ク、長尾陷イラバ則チ敵我が背ニ出シ救ハザル可カラズト、氏春ヲ遣ハシ千餘騎ヲ以テ赴キ救ハシム、直行射戦シテ暮ニ至ル、炬ヲ列ネテ潛ニ還ル、黎明頼之ト白峰ヲ攻ム、呼譟シテ戦ヲ挑ム、清氏輕甲シテ馳セ出ツ、馬箭ヲ負フテ殪ル、兩騎ト搏テ死ス、氏春直行ノ去ルヲ覺テ之ヲ追フ、途ニ白峰ヲ望ム、之ヲ頼之ノ旗幟ナリ、乃チ和泉ニ走ル、長尾攻ズシテ陷イル、四國盡ク定マル而シテ國清、義深又基氏ニ降ダル、基氏將ニ之ヲ誅セントス、國清西ニ走テ官軍

島山 國清 餓死

ニ降ダル、官軍許サズ、終ニ餓死ス、義深脱走シ、後チ義詮ニ降ル、是ニ於テ降ルモノ相踵グ、大内弘世久シク官軍ニ属シ、周防長門ヲ略取ス、乃チ二國ヲ擧テ来リ降ル、十九年、山名時氏、仁木義長、石堂頼房、吉良満貞等之ヲ降ル、義詮皆其罪ヲ宥ス、基氏モ亦上杉憲顯ノ己ヲ育スルヲ思フヤ、之ヲ信濃ニ招ク、授クルニ越後ノ守護ヲ以ス、舊守護清禪可ヲ逐フ、禪可、憲顯ヲ拒イテ克タズ、下野ニ走ル、己ニシテ基氏、憲顯ヲ鎌倉ニ召ス、禪可又要シテ之ヲ撃ツ、基氏怒リ自ラ將トシテ之ヲ討ツ、大ニ苦林野ニ戦テ之ヲ破ル、禪可遁レ走ル、乃チ



憲頭  
為錄  
倉執  
事

憲頭ヲ以テ執事トシ、以テ畠山國清ニ代フ細川清氏  
ノ敗ル、衆斯波氏因テ推シテ代テ執事トス、氏因ハ  
高経ノ子、道譽ノ婿ナリ、高経、氏因ヲ短短トナシ、後妻  
ノ子義將ヲ薦テ執事トス、而シテ己之ヲ決ス、裁決高  
経、北條氏ノ盛時ヲ觀ルニ及ブ、衆其治平ヲ期ス、北條  
氏ノ盛時ヲ觀ル故ニ、衆極テ已ニシテ、為ス所多ク人  
其聽政モ善ル可ト謂フ也、已ニシテ、為ス所多ク人  
望ヲ失ナフ、初メ尊氏直義、文武文武ノ邑入五十合ノ  
一ヲ賦シテ、軍興費ニ充ツ、高経之ヲ倍シ、建武ノ故事  
元年、諸國ノ地頭、入ル所ノ如クス、衆之ヲ怨ム、義詮坊  
門ノ第ヲ造ル、諸將ニ課シテ、工ヲ助ケシム、工匠ノ手  
傳ヲ命ス

高経  
道譽  
相卿

ルナ 赤松則祐功ヲ緩フス、助エヲ緩高経罰シテ其邑  
一所ヲ奪フ、五條橋ヲ造ルニ、道譽役ヲ董ス、京師ノ戸  
租ヲ徵ス、道譽家税ヲ歛メテ、以テ橋久シテ成ラズ、高  
経私金ヲ捐テ立所ニ之ヲ成ス、後チ高経諸將ヲ幕府  
ニ宴ス、道譽乃チ事ニ託シテ會セズ、而シテ私カニ伎  
樂ヲ大原京城ニ張ル、高経之ヲ御ム、怨ヲ御會ク、道譽  
賦ヲ納メザルニ、二歳、因テ其摂津ノ守護ヲ奪フ、道譽終  
ニ則祐等ト共ニ高経ヲ譖ス、義詮即チ密ニ兵ヲ召シ  
テ之ニ備フ、高経入テ見ヘ、寛ヲ訴フ、義詮慰解シテ、越  
前ニ遣歸ス、二十一年十月、山名時氏、畠山義深等ヲ遣

後醍醐天皇  
足利二  
十一  
可成



啓蒙 卷之十一 備前 備前 備前

細川 頼之 為領

足利 義詮 薨

ハシ、高経父子ヲ攻ム、二十二年七月、高経病死シ、義將  
降ル、高経既ニ死シテ、義詮、道譽ヲ以テ執事トセント  
欲ス、基氏、細川頼之ヲ薦メテ之ニ代ラシム、執事ヲ更  
稱シテ管領ト曰フ、十二月、義詮疾ヒアリ、幼子春王ヲ  
シテ政ヲ監セシム、是ヲ義満ト為ス、義詮遂ニ薨ス、三  
ナリ、義詮官正二位大納言ニ至ル、是歲夏、基氏モ亦病  
テ卒ス、尊氏、基氏ヲシテ關東ヲ督シ、將軍ヲ佐ケシム、  
世シテ以テ其 義詮每ニ基氏ヲ疑ス、基氏神ニ祈リ、早  
疑ヒヲ釈ク、基氏官從三位左兵衛督ニ至ル、基氏材  
武アリ、義詮ノ為メニ關東ヲ鎮シテ、尊氏ノ舊業ヲ失  
ハガラシム、時論之ヲ惜ム、基氏ノ早世ヲ惜ムナリ、其子金王嗣テ

一 子 汝 父

幕府 置童 坊

立ツ、是ヲ氏満ト為ス、義満立ツ甫テ十歳ナリ、細川頼  
之管領ト為ル、初メ義詮終ニ臨ンデ義満ヲ撫シ、頼之  
ニ謂テ曰ク、汝ニ一子ヲ予フト、又頼之ヲ指サシテ、義  
満ニ謂テ曰ク、汝ニ一父ヲ予フト、頼之既ニ遺託ヲ以  
テ幼主ヲ輔ク、内外治ヲ望ム、乃チ方正ノ士、文武備具  
ノ者ヲ擇シテ、義満ノ左右ニ侍セシメ、マ々滑稽者、滑  
乱ルナリ、替ハ同キナリ、辨捷ノ人、非ヲ言フ是、ノ  
如ク、是ヲ言フ非ノ如ク、能ク同異ヲ乱ルヲ使フ、數人  
ヲ撰ミ、髮ヲ削リ、大袴ヲ穿テ、長刀大撃ヲ佩シメ、目ス  
ルニ童坊ヲ以テシ、府中ニ出入セシメ、將士ノ弄客ト  
為ス、將士ノ中ニ便佞ノ語ニ習フテ聞見ナル者アレ

足利ニ 十二 可不成言哉



有髮  
童坊

賴之  
五箴

髪童坊ト曰テ以テ之ヲ斬辱シ更ニ相懲戒ス士風大  
 革マル賴之又五箴戒言ヲ作り將士ニ授テ曰ク愛  
 憎ニ偏ル母レ恩仇ヲ修ムル母レ是非ヲ枉グル母レ  
 僥倖ケウコウヲ求メテ止スル母レ私慝シトクスル母レト又今川  
 小笠原伊勢ノ三氏今川伊豫守貞世小笠原兵ヲシテ  
 將府ノ禮式ヲ草セシム草稿尊氏義詮ノ下ス所ノ文  
 書ヲ檢シ其高氏佐々木氏ノ宜達ニ出タル者ハ漸ク  
 之ヲ収奪ス高師直佐々木道譽二人失政ヲ以テ世基  
 氏善ク人ヲ知り義詮善ク人ニ任スト稱スト云フ基

平一揆  
據河

菊池  
武敏  
起兵

氏終リニ臨テ亦氏満ヲ上杉憲顯ニ託シテ曰ク謹ン  
 デ京師ノ約束ナリヲ奉ジ倍畔スル或ル莫レト氏満  
 義満ヨリ少キ一歳憲顯心ヲ盡シテ輔翼ス關東倚  
 安ナリ二十三年義満冠ス賴之賓ト為ル義満遂ニ征  
 夷大將軍ヲ襲フ是歳上杉憲顯病ンデ卒ス義子能憲  
 代テ執事ト為ル是ヨリ先キ平一揆ナル者アリ叛テ  
 河越ニ據ル憲顯氏満ヲ奉ジ討テ之ヲ滅ス宇都宮氏  
 叛ク又撃テ之ヲ平ラグ能憲代テ執事トナルニ及デ  
 新田義宗等兵ヲ起ス能憲弟ノ憲春ト撃テ義宗ヲ獲  
 タリ建徳二年菊池武敏兵ヲ肥後ニ起ス賴之今川貞

武敏起兵

平一揆

十三

可成會

石叢  
卷之十一  
 何不為會



后蒙正本史 卷之十二 伊弉册舎藏

文中元年

北朝 後圓融帝

土岐 康行 叛

世ヲ以テ鎮西探題ト為シ、大内義弘ヲシテコレヲ助  
シメ以テ菊池ニ備ス、又弟頼元ニ命ジ、南朝ノ降將ヲ  
助ケテ、以テ吉野ヲ攻メシム、文中元年、北朝ノ太子禪  
リヲ受ク、是ヲ後圓融帝ト為ス、二年、細川氏春ヲ遣ハ  
シ、吉野ヲ攻メシム、藤原隆俊ヲ獲タリ、是歲直冬、石見  
ヨリ来リ降タル義滿第ヲ室町ニ起ス、花御所ト稱ス、  
四足門ヲ造ル、天授四年、徙テコレニ居ル、五年、義滿軍  
ヲ東大寺ニ出タシ、山名義理、山名氏清ヲ遣ハシ、南侵  
ス、土丸城紀伊ヲ拔ク、益々兵ヲ近江美濃ニ召ス、美濃ノ  
土岐康行叛ク、因テ又兵ヲ鎌倉ニ召シテ之ヲ討ツ、是

憲春 諫氏 滿而 憂死

時憲春鎌倉ノ執事タリ、其弟憲方ヲ遣ハシ、兵ヲ將斗  
テ西セシム、康行ノ降タルニ會テ乃チ止マル、而レテ  
氏滿將士ノ義滿ヲ怨望スル者多キヲ聞クヤ、竊カニ  
異謀アリ、謀ゴト寢泄ル、義滿南師南侵ヲ召シ還ヘシ、  
潛カニ手書ヲ憲春ニ賜ヒ、氏滿ヲ諫メシム、氏滿聽カ  
ズ、憲春憂懣シテ自殺ス、氏滿驚キ悔テ謀ゴト遂ニ解  
ク、憲方ヲ以テ執事ト為ス、上杉細川ノ二氏久シク推  
ヲ東西ニ執ル、義滿漸ク長ジ、頗ブル頼之ヲ忌ム、近臣  
從テ之ヲ惡ム、四月、義滿兵ヲ幕府ニ集メ、使者ヲ遣シ  
頼之ノ第ニ就キ、管領職ヲ罷メ、國讚岐ニ就カレム、斯波

後蒙正本史 卷之十二 足利二 十四 可下反舎藏



斯波 義將 為管領

弘和 元年

後小松 帝立

信不所會藏

義將ヲ以テ管領ト為ス、賴之即日途ニ上ル、尋テ髮ヲ削リ常久ト號ス、詩ヲ作テ曰久人生五十無功ヲ愧ヅ、花木春過テ夏已ニ中ス、滿室ノ蒼蠅ソウヨウ比ヒス、掃ヘ氏去リ難シ、起テ禪榻ヲ尋テ清風ニ臥スト已ニシテ義滿其勲勞ヲ思ヒ、命レテ南海ヲ總管セシム、六年山名氏清大ニ官軍ヲ南海ニ破ル、弘和元年又大ニ之ヲ破ル、南海盡ク定マル、獨リ吉野南朝ニ隸スルノ是歲北朝ノ太子禪リヲ受ク、是ヲ後小松帝ト為ス、五年帝室町ノ第ニ幸ス、元中四年帝冠ス、義滿髮ヲ理メ、攝政藤原良基冠ヲ加フ、以テ恒例ト為ス、良基六朝ニ歷任シ、

中立シテ自ラ全フシ、最モ義滿ト親シメ善シ、五年義

滿紀伊及ビ駿河ニ遊ブ、東南ヲ圖ルナリ、南吉野東新田氏等ヲ

六年又西海ヲ圖ラント欲シ、嚴嶋ニ遊ビ賴之ヲ召

見ス、命ジテ舟ヲ具シ鎮西ニ赴ク、風ニ遇テ還リ讚岐

ニ至ル、乃チ人ヲ屏ゾケ、與ニ語ル、之ヲ久フス、賴之

感涕シテ、將軍ノ殊ニ遇ハル出ヅ、義滿遂ニ京師ニ歸

ル、是時ニ當テ、四方漸ク定マル、諸宿將赤松則祐、佐々

木道譽ノ如キハ、前後死亡ス、其嗣ヨシキニナ屑シ、展弱獨リ

山名氏聲威甚ダ熾シ、初メ山名時氏叛キ、五州因幡、伯耆、丹波

丹後ヲ略取シテ降ル、因テ其守護ト為ス、八子アリ、師

美作ヲ略取シテ降ル、因テ其守護ト為ス、八子アリ、師



山名時氏  
六分氏  
一氏

義、義理、時義、氏清、氏冬、義教、高義、氏重、之ナ世ニ頭ハル、  
富諸將ニ最タリ、世相語テ曰ク、其家ヲ大ニセント欲  
セバ、叛クヨリ善キハ莫シト。時氏足利ニ叛キ五州ヲ  
畧取メ降ル、而ルニ又命  
ジテ其守護ト義理、氏清ニ及ビ、又攻テ南海ヲ取ル、凡  
ソ山名氏管スル所十州ニ跨ガル、世呼デ六分一氏ト  
曰フ、海内ヲ六分シテ其一ヲ有ツト謂ハルナリ、義滿  
之ヲ惡シ、常ニ陰ニ之ヲ誅鋤スルヲ計ル、時義、師義ノ  
後ヲ承ク時義ノ二子時熙、氏幸、但馬伯耆ノ守護ヲ分  
讓ス、師義ノ子滿幸、寢シ之ヲ譖シテ、其國ヲ奪ハント  
欲ス、七年義滿、氏清ト滿幸トニ命ジテ赴キテ時熙氏

氏清  
請義  
滿來  
觀紅  
樹

幸ヲ討タシム、氏清發スルニ臨ンデ請テ曰ク、彼降テ  
赦ス可レバ、則チ臣先之ヲ諭シ來ラシメン。氏清説諭  
シテ來歸  
セシメント欲必シモ赴キ討セザル也ト、義滿曰ク、降  
ル氏赦サミルナリト、乃チ往ク、撃テ之ヲ走ラス、義滿  
因テ二州ヲ氏清、滿幸ニ分チ賜フ、又細川頼之ヲシテ  
討テ備中ヲ平ゲシム、八年春、頼之ヲ京師ニ召シ、其養  
子頼元ヲ以テ管領ト為ス、而シテ頼之事ヲ決ス、時熙、  
氏幸、來テ冤ヲ無失ノ罪ヲ受ケテ訴ルニ會フ、義滿之ヲ  
許サント欲ス、十月、氏清、義滿ヲ宇治ノ別第ニ請テ、紅  
樹ヲ觀セシム、期ニ先ツト一夕、氏清和泉ヲ發シテ北



臣蒙... 卷之十一

上ス、將ニ具ヲ視ントスルナリ饗礼ノ具ヲ督満幸氏

清ヲ淀ニ邀ヘ告テ曰ク聞クガ如シ幕議幕府ノ評議時熙

氏幸ヲ舊領ニ復スト、詰朝朝朝將ニ面アタリ之ヲ命

ゼントスル也、公宜シク病ト稱シテ會ヲ辞スベシト、

氏清怒テ曰ク何ゾ去歳ノ言ニ相反クヤ去歳降ルモ

レ為ント拜黜シテ饗スルニ乃チ人ヲシテ義満ヲ途

ト、義満已ニ宇治ニ至リ、駕ヲ廻ラシテ帰ル、一行ニ驚

キ異シム、満幸氏清ノ女ヲ娶テ、尤モ親愛セララル、言フ

満幸 奪上 皇邑

所皆聽カル、自ラ京師ニ在テ四州ヲ總管ス、管内ニ上

皇後四邑アリ、奪テ之ヲ并ス并セ有義満教軍

ト曰フ、教ヲ下シテ還シ納レシム侵地ヲ上皇ニ満幸

倂リ上皇ノ使ヒテ迎ヘテ、陰ニ邑人ヲ誡シメ之ヲ逐

ハシム満幸上皇ノ使ヲ封内ニ倂リ迎ヘ御邑ノ人ヲ

テ己、并有ノ責ヲ義満大ニ怒リ、満幸ニ命ジ職ヲ罷メ

テ國ニ就カシム、曰ク汝ノ宿衛益ナシ、宜シク去テ汝

ガ國ニ據ルベシト、十一月満幸丹後ニ歸ル、京師指サ

満幸 説氏 清反

氏清ニ説テ曰ク近日ノ政ゴト公之ヲ何ント謂ス去

可不成舎載



石巻 卷之十一

氏清 有異志

歳吾ガ曹ヲシテ、時熙氏幸ヲ討シメテ、今歳之ヲ赦ス  
時熙氏幸ヲノ其將ニ反テ吾ガ曹ヲ討シトス、是レ枝  
舊領ニ復セシムヲ剪リ根ヲ絶ノ計ニ非ズヤ、今鬪族  
シカヲ戮セテ以テ大事ヲ擧ケバ、京ニ在ル諸將誰カ  
我ニ敵セン、苟クモ京師ヲ取ルヲ得バ、附ク者必ス多  
カラシ、土岐富樫ノ諸族ノ如キハ方ニ怨望、將軍ヲ  
懐ク、必ズ衆ニ先タツテ来リ属セン、公速カニ兵ヲ揚  
テ、細川氏ヲ除クヲ以テ辞ト為セ、事成ザル無ケント、  
氏清素ヨリ異志アリ、材武ヲ自負ス、土岐康行ノ叛ク  
ト天授五年、義満即チ討テ之ヲ平ラク、氏清聞テ笑テ

復時 熙氏 幸邑

氏清 伴謝 罪

曰ク、康行與ニシ易キノミ、延公氏清自カノ如キニ至  
テハ自カラ然ラザル也ト、是ニ於テ遂ニ満幸ノ言ヲ  
納レ、謀ヲ合セ期ヲ約シテ別レ、各自カラ兵ヲ集ム、幕  
府ヲ夾サミ攻メント欲ス、幕府未ダ之ヲ覺ラザルナ  
リ、議シテ曰ク、氏清ノ七状、譴責セザル可カラズ、而シ  
テ事ハ復邑嚮ニ時熙ノ邑ヲ収メテ氏清ニ賜フ、而シ  
トスルヲ端トス、邑果シテ復セザレバ、則チ是レ予奪  
ヲ下ニ聽クナリト、是ニ於テ果シテ時熙氏幸ノ邑ヲ  
復ス、遂ニ氏清ヲ討ツヲ議ス、氏清之ヲ聞キ、故チラ  
ニ使ヲシテ前日ノ罪ヲ謝セシムル者再三ス、義満誓

氏清 伴謝 罪



啓蒙日本外史 卷之十二 何不成舎藏

會議 拒氏 清

書ヲ徵シテ之ヲ宥ス事卒ニ解ク十二月丹後ノ人變  
ヲ上ツル言上 滿幸反スト告ク幕府未ダ信ゼズ畠山  
基國ノ將游佐某シ河内 又河内ヨリ氏清大ニ戰具ヲ  
修メ將ニ發セントスト告グ基國ハ義深ノ子ナリ已  
ニシテ氏冬出デ男山ニ奔ル義理又紀伊ノ兵ヲ冬  
義將皆山名時 擧テ北ニ嚮フ北京師ニ向ヒ京師大ニ  
氏ノ子ナリ 擾ル義滿書ヲ以テ義理ニ諭ス義理聽カズ是ニ於テ  
義滿乃チ親カラ古山滿藤ノ第ニ臨ミ諸將ヲ會シテ  
戰ヒヲ議シテ以テ其嚮背ヲ視ル諸將ノ叛クト諸將  
之ナ至ル聚議決セズ或ハ曰ク審カニ彼ノ輩ノ詐ヲ

ル所ヲ聽テ以テ之ヲ舎メバ必ス無事ナラント義滿  
曰ク氏清異志ヲ蓄フル日久シ今日ノ擧必ズ詐ヲ  
ル所有ル非ハナカラフ即チ今日之ヲ舎メバ明日復タ  
反セン吾聞ク彼レ諸君ヲ輕易シテ曰ク幕府ノ諸將  
誰カ能ク我ニ敵セント吾諸君ノ為メニ之ヲ耻ヅ誅  
セスンバアル可ラザルナリ意謂ス彼レ必ズ我東  
山叡岳ニ據ルト吾乃チ親カラ出デ東寺ニ陣シ諸君  
兵ヲ内野ニ盛ラハ盛ハ物ヲ受ル也彼内野ノ軍ヲ見  
テ必ズ来タリ衝ン則チ鼓螺相應ジ夾サンデ之ヲ擊  
タバ一戰シテ殲ス可キナリト衆皆之ヲ然リトス一

可不成舎藏 十九



一色詮範  
建策

色詮範前シテ曰ク、臣敢テ異議ヲ獻ズ、夫レ元帥後ニ  
在テ、諸將前進スルハ、是戦ノ宜シキナリ、前議之ニ反  
ス、且東寺ト内野ハ、地勢隔絶シテ策應ジ難シ、策ヲ通  
便ナラズ、諸將内野ニ陣シ、一隊ヲ東寺ニ屯シ、而シ  
テ臣ノ第ヲ以テ牙營將軍ノ陣ト為スニ如カズ、則チ  
彼レ必ズ銳ヲ悉クシ我中軍ニ赴カン、其雋俊ト同ジ  
存獲ベキナリ、彼レ即シ東洞院ヨリ北上セバ、則チ諸  
將迭ヒニ出テ、之ヲ街巷中ニ要シ、東寺ノ兵其後ヲ尾  
撃シ、以テ之ヲ鑿ニス可レト、義満曰ク善シト、明早今  
川泰範、六角満高ヲ遣ハシ、八百騎ヲ以テ東寺ニ據ラ

義満  
大名  
大山  
氏清

シメテ、義満自カラ弟満詮ト、三千騎ヲ率テ出デ、詮  
範ノ堀川ノ第二陣ス、烏帽直垂ニテ刀ヲ帶テ甲セズ、  
家僕ヲ討ツノ禮ナリ、諸將ニナ偏甲シ、甲ヲ擧シテ、冑  
云次ヲ以テ前ム、細川頼之、細川頼元、畠山基國、赤松義  
則、其西北ニ備フ、佐々木高詮、斯波義重、其西南ニ備フ、  
大内義弘ヲ以テ先鋒ト為ス、兵凡ソ五千餘、内野ヲ環  
リテ陣ス、初メ氏清、満幸、是月二十七日、京師ニ入ルヲ  
期ス、而レテ游佐某シヲレテ河内ノ岳山ヲ塞ギ、以テ  
氏清ノ兵ヲ要セシム、氏清ノ兵期ニ後ル、二日ニシ  
テ男山ニ至ル、氏清、男山ニ在テ、其宰小林時直ヲ召シ

足利ニ  
二十  
可不成合哉



啓蒙日本外史 卷之十二 仁不府舎痛

小林時直忠言

テ謂テ曰ク吾ハ新田氏ノ支族タリ、即チ足利氏ニ代  
ルモ誰カ不可ト為サン、吾將軍為ルヲ得バ、汝ヲ以テ  
執事ト為サント、時直涕ヲ流シテ曰ク、臣諫テ此舉ヲ  
止メント欲ス、而ルニ久シク疎斥セララル、乃チ今日見  
ルヲ得ルノニ、今諸將ノ富誰カ君家ニ如ク者ゾ謂  
ル大分一氏其恩ニ背キ事ヲ擧グ、神堂之ヲ右ケンヤ  
富知ルベシヨレミツ即シカ克ツヲ獲ルモ諸將安ゾ能ク我下ト為ラン、臣嚮  
背ニ惑フ逃レント欲レバ、則チ勇ヲ傷ル、戦ント獨リ  
前スンデ死スルヲ有ルノ之、夫執事職ノ若キハ則チ之  
ヲ他人ニ命ゼヨト、氏清退キ義カズ数上総ニ囑シテ曰ク

山名足利戦争

時直意色甚ク決ス、汝之ト耦シ浪リニ死セシムル母  
レ耦進シテ時直ヲ義救ノ意モ亦速カニ死セント欲  
ス、唯々ウケテ諾ナトシテ退ク、満幸ノ臣大足某シ次郎左  
亦満幸ヲ諫ム、満幸聽カズ、即夜氏清二千騎ヲ以テ浮  
橋ニテ淀ヲ濟リ、氏冬ヲシテ三百騎ヲ以テ鳥羽路ヲ  
繞リテ軍ヲ會セシム、而シテ満幸千餘騎梅津ヲ濟リ、  
後敵軍ヨリ之ニ應ゼント欲ス、已ニシテ満幸夜迷フ  
テ道ヲ失フ、氏冬ノ軍又郷導ナシ、渚中ヲ徑リ相驚イ  
テ退ク、氏清報氏冬ノヲ待ニ至ラズ、乃チ氏清義数時  
直ヲ遣ハシ先進マシム、呼コソウ譟シテ義弘大内一逼ル、義弘

足利二 二十一



義教時直共戰死

大宮ニ陣ス、其兵ニ謂テ曰ク、我曹數々功ヲ鎮西ニ樹  
以上國ニ戰フニ至テハ、今日ヲ始メト為ス、汝等之ヲ  
最ノヨト、射手二百ヲ繼チ、而シテ三百騎馬ヲ下リテ  
楯進ス、接戦スル下、數合、死傷相當ル、義教時直小顧リ  
之テ義滿ノ軍ニ馳突ス、義弘曰ク、敵イッ隻騎ヲモ我營ヲ  
過テ北セシムルハ我罪ナリト、走テ之ヲ遮リ、手ツカ  
ラ、薙刀ヲ揮テ時直ヲ斬ル、義教間ヲ得テ北ニ馳ス、垣  
ヲ踰テ墜ツ、コハ牙宮ノ垣ヲ踰、オ牙兵ニ獲ラレタリ、義弘馳  
テ中軍ニ赴キ、上言シテ曰ク、臣殊死ハ絶ナリ、殊死  
リシテ戰ス、而レ氏清ノ大兵繼ギ至ル、請フ援兵ヲ

土屋黨大軍足死

賜へ、將軍臣ヲ喪ハミ、誰カ臣ニ繼グ者ゾト、義滿其鎧  
馬ヲ視ルニ朱殷ナリ、之ヲ壯ンナリトシテ、手ツカラ  
佩刀ヲ賜フテ曰ク、更ニ此ヲ以テ一戦セヨト、因テ義  
則ヲ麾イテ赴キ援ケシム、滿幸梅津ニ至リ、大宮ノ戦  
ヒ已ニ酣ナリト聞キ、則チ疾ク進ンテ、賴之川細基國畠  
ト戦ス、高詮来リ援ク、土屋ノ黨大足次郎左衛門、関平  
ヲ撃テ之ヲ殲シ、大足ヲ斬ル、而レ氏基國寺ノ兵利ア  
ラズ、義滿親カラ赴テ之ヲ援ク、大ニ呼テ曰ク、盍ソ速  
カニ登子部ノ稱ヲ梟セガルト、諸將爭ヒ進ム、滿幸  
遂ニ敗走ス、義教滿幸既ニ敗ス、敗卒走テ之ヲ氏清ニ



滿則戰死

詮範斬辰房

報ズ、氏清乃チ氏冬ト合シテ進ム、義則逆ヘ戦ス、其弟  
 滿則之ニ死ス、山名時熙事端己ヨリ起ルヲ以テヤ時  
 熙ノ父時義師義ノ後ヲ承ク、既ニシテ師義ノ子滿幸、時  
 熙ヲ諷ノ其国ヲ奪ハント欲ス、義滿、氏清滿幸ニ命ソ  
 時熙ヲ討シメ、其封ヲ収テ氏清滿幸ニ賜フ、事端是テ力戦シテ氏清ニ當ル、悉  
 ク其兵ヲ亡ボシ、走テ義弘ニ歸ス、義則交ク使ヒテ馳  
 テ援ケテ義滿ニコフ、義滿左右ヲ顧ルニ遣ハス可キ  
 者ナシ、詮範軍吏ヲ以テ麾下ニ在リ、自カラ請フテ往  
 ク、勝敗未ダ決セズ、是ニ於テ、義滿牙旗ヲ建テ、進ム、  
 氏清ノ兵望之見テ曰ク、將軍至レリト、乃チ潰ヘ奔ル、  
 詮範子ノ滿範ト、曰ヲ氏清ニ注イテ前之鬪カフ、遂ニ

明德役

之ヲ斬ル、其義兒辰房ニ及ブ、辰房ハ氏重ノ子ナリ、氏  
 清ノ首麾下ニ至ル、義滿顧ミテ衆ニ謂テ曰ク、諸君叛  
 逆ヲ謀ル者ヲ視ヨ、終ニ如何ゾヤト、時十二月晦日ナ  
 リ、明年正月山名氏ノ地ヲ割テ諸將ヲ賞ス、和泉紀伊  
 ヲ義弘内ニ、隱岐出雲ヲ高詮佐々ニ、美作ヲ義則赤ニ、  
 丹波ヲ頼元細ニ、山城ヲ基國山島ニ、賜フ、詮範色ニ賜フ  
 今富莊ヲ以テス、義則ハ則祐ノ子、高詮ハ道譽ノ曾  
 孫ナリ、時ニ北朝ノ年號ハ明德之ヲ明德ノ役ト謂フ  
 滿幸ノ走ルヤ、詭シメテ之ヲ止ル者アリ、聞カザル為  
 シテ逃ル、二月伯耆ニ歸ル、其將鹽冶師高ヲシテ出雲

後蒙日外史 卷之十二 足利二 二十三



啓蒙 卷之十二 何不成

塩谷 師高 死義

ヲ守ラシム、高詮ノ將吏来タリ誘ナフニ利ヲ以テス、  
師高答テ曰久山名氏此ニ至ル所以ノ者公義ヲ足利  
氏ニ失ヘバナリ吾モ亦義ヲ山名氏ニ失フヲ欲セズ  
吾父ノ分ナリ自カラ吾ト異ナリ將ニ出テ命ニ應ゼ  
シトス幸ヒニ善ク之ヲ視ヨト爾ナリ視乃チ其父ヲ諭  
シテ出デ、降ラシム送テ城下ニ至ル既ニ訣レテ自  
殺ス、曰ク吾父ト闘フニ忍ビズト城乃チ陷イル其兵  
走テ満幸ニ報ダ満幸氏冬ノ回幡ニ在ルヲ聞キ又走  
テ之ニ帰ス、氏冬素ヨリ降ル志アリ満幸ヲ迎ヘ撃テ、  
以テ口ヲ藉ラント欲スヲ迎ヘ撃テ以テ口實満幸終ニ

氏清 母愠 死其子 激

髪ヲ削リ鎮西ニ逃ル、氏清ニ後ル、五歳ニシテ獲ラ  
レテ誅セラル、氏清ニ子アリ満氏時清ト曰フ初メ父  
ノ命ヲ以テ逃レテ満幸ニ帰セント欲ス、而レ氏相遇  
ハズ、亦髪ヲ削リ南ニ走ル南和泉其母ヲ見ント欲ス、  
母愠リテ見ズ、及ニ伏シテ死ス、二子走テ義理山名時  
ニ帰ス、義理降ルヲ乞フ、義満許サズ、義弘ヲシテ國山  
紀伊等ノ和泉ニ之カシム、紀伊ノ人盡ク義弘ニ附ク、  
義理海ニ航シテ逃ル、氏冬降ルヲ乞フ、其初メ叛ク志  
ナキヲ陳ズ、特ニ之ヲ許ス、是ニ於テ事即チ定マル三  
月義満諸將ヲ率キテ捷ヲ男山ニ賀セント欲ス、細川

足利 二十四



細川頼之疾死

頼之疾ヒ篤シ、義満行ク男山ニ行ヲ止ム、頼元頼之弟ノ弟ヲシテ其言遺言ニ欲スル所ヲ問ハシム、頼之對テ曰ク、近者山名氏ノ族動モスレバ、教令ヲ茂オモシロニス、臣常ニ之ヲ憂ス、今既ニコレヲ獲タリ、氏清ノ獲テ天下誰カ復將軍ノ患ヒヲ為ス者ゾ、臣以テ瞑ス、目ヲ翕スルナリ、安メカサフ可キナリト、乃チ卒ス、義満親カラ其喪ニ臨ミ、泣ヲ垂レテ之ヲ送ル、為ニ手ヅカラ佛経ヲ寫ス、又法會ヲ内野ニ設ケ、陣ウチジノ將士ヲ弔ラフ、初メ氏満、氏清ノ叛ヲ聞キ、兵ヲ發シテ將ニ西上シ、其黨援ヲ為ントス、氏満叛ク、憲春死ヲ以テ諫ムルニ、其敗死ヲ聞イテ、乃因テ止ム、然レ氏満怨望絶々ズ

新田遺孽

チ止ム、是ヨリ先キ、新田氏ノ餘黨小山義政、宇都宮基綱ヲ殺ス、氏満上杉憲方ヲ遣ハシ、攻メテ義政ヲ降ダス、義政復叛ク、氏満自カラ將トシ、撃テ之ヲ殺ス、其孤釋イヌ狗又兵ヲ陸奥ニ起ス、復攻テ之ヲ殺ス、其黨田村則義、小田五郎ナル者モ亦兵ヲ起ス、上杉朝宗ヲ遣ハシ、撃テ之ヲ夷ラグ、新田氏ノ遺孽二人ヲ獲、京師ニ送テ之ヲ斬ル、義満乃チ封ヲ氏満ニ加ルニ、陸奥出羽ヲ以テス、今川貞世等モ亦撃テ小貳冬、資等ヲ平ラグ、是ニ於テ四方大ニ定マル、獨リ楠氏ノ遺孽大和河内ノ間ヲ保守シ、以テ吉野ノ藩蔽ハンベイ屏ナリ、藩ト為ル、義満、畠山義



南朝北 成帝 還北

深大内義弘ノ二將ヲシテ之ヲ圖ラシム、義深盡ク楠  
氏ノ城壘ヲ拔ク、吉野孤立ナリ、義弘乃チ義滿ノ意ヲ  
以テ、南朝ニ奏シ請ヒ、和ヲ講ジテ兵ヲ弭シム、車駕京  
師ニ還リ、器ヲ北朝ニ授ケ玉ヘハ、則チ今ヨリ以後、兩  
統更ル立チ、猶北條氏ノ時ノ如クセント、北條貞時、後  
帝ノ兩統更立、帝、後龜山之ヲ許ス、乘輿北ニ還ル、義滿、北  
朝ノ意ヲ以テ來リ降ダルノ禮ヲ用ント欲ス、帝、禪讓  
ノ禮ヲ用ント欲ス、物議洶々、水ノ涌ク声ナリ、人々、  
六角滿高、義滿ニ謂テ曰ク、器彼ニ在リ、彼乃チ真ノ天  
皇ナリ、君第之ヲ聽ケト、禪讓ノ禮ニ、滿高ハ義滿ノ弟、

永元 元年

六角氏頼ノ子ト為ル者ナリ、義滿乃チ駕ヲ迎フ、大覺  
寺ニ御ス、閏五月五日、後小松天皇神器ヲ後龜山天皇  
ニ受ク、後龜山帝ハ即チ後醍醐帝ノ皇孫ナリ、後醍醐  
帝南遷、南讚岐ヨリ、凡ソ五十有七年、而シテ北朝五帝  
ナリ、光明帝、崇光帝、後光嚴、改元スル者、曆應ヨリ明德  
ニ至ルマデ、十有七、天下足利氏ノ故ヲ以テ、際ムネ其  
正朔ヲ奉ズ、北朝ノ年号ヲ是ニ至テ南朝ト合ス、物情  
益々之レニ服ス、後小松天皇ノ應永元年、義滿征夷大  
將軍ヲ長子義持ニ讓ラント請フ、二年、義滿髮ヲ削リ  
道義ト號ス、北山ノ別業ヲ營ム、諸將ヲシテ役ヲ助ケ



義滿 謙職 義持

金閣 成

義弘 結義 時説 貞世

シメ、金閣金銀ヲ鑄之ヲ起ツ、四年コレニ徙ル、義持室町ノ第三居ル、而シテ内外ノ事、決フ北山ニ取ル十一月足利氏滿卒ス、子ハ滿兼關東管領ヲ襲フ是時ニ當テ足利氏ノ威外國ニ及ブ、朝鮮數ク使鄭夢周等ヲ遣ハシ、今川貞世ニ造テ隣好ヲ修メシト請ス、是歲使者遂ニ京師ニ來ル、義滿大内義弘ヲシテ之ヲ接待セシム大内義弘嘗テ貞世ニ説テ曰ク、方今ノ勢ヒ弱キ者ハ誅セラレ、強キ者ハ禍ヲ免ル、公盍ゾ我及ビ大友氏ト兵ヲ連ツキ連ナリ合テ以テ自カラ強フセザルト、貞世聽カズ、義弘反ツテ斯波義時等ト俱ニ貞世ヲ譖ス、義滿乃

大内 義弘 叛 利

子貞世ノ約束ヲ更カフ初メ貞世條陳スル所ノ鎮西ノ是ニ至テ義滿九國ノナ危ブク疑フ、菊池大村ノ二氏之ヲ更改ス、並ビニ兵ヲ起ス、義弘擊テ之ヲ平ラズ、兵力益ク強シ、陰ニ滿兼ト謀ヲ合セ、東西相援ケテ、以テ義滿ヲ圖ル、六年滿兼密カニ貞世ヲ招ク、貞世其書ヲ封ジ、義滿ニ上ツル、義滿、義弘ヲ召ス、義弘來ラズ、十月義弘、遂ニ周防長門諸國ノ兵ヲ帥テ、界城ニ至ル、土岐詮直美濃ニ起リ、京極基シ衛五郎左近江ニ起リ、山名氏清ノ二子時清丹後ニ起リ、並ビニ義弘ニ應ズ、而シテ滿兼モ亦出テ、武藏府ニ陣シ、義滿ヲ援クト宣言ス、義滿是ニ

可下成合



於テ急ニ貞世ヲ召シテ曰ク、吾公ヲ見ルヲ愧ヅルナ

リト向ニ貞世ノ約束時ニ幕府兵寡シ、土岐頼益六角

満高等往テ美濃近江ヲ討ツ、在ル者皆戦フニ堪ヘズ、

義弘曰ク、氏清唯リ京師ヲ攻ム、自ラ兵馬ヲ疲ラズ、敗

ル、所以ナリト、因テ守計籠城ヲ為ス、塹堊ヲ修メ、樓

櫓ヲ起テ、自カラ巡視シテ曰ク、百萬ノ衆アリト雖モ、

拔ク能ハザルノミト、義満先、僧中津ヲ遣ハシテ、兵ヲ

起スノ由ヲ詰責ス、義弘對テ曰ク、吾十六歳ヨリ鎮西

ニ在テ、大小十八戦ス、氏清ヲ夷ラギ南朝ニ構ス、功勞

多キニ匪ズ、昨年ノ役菊池、大村ニ氏ニ介弟介ハ大ナ

ハ貴寵ノ大又没ス、而シテ幕下其孤義弘自カヲ恤マ

弟ヲイフ、且聞ク國ヲ削ルノ議アリテ、密ニ少貳、菊池ノ二氏

ヲシテ我ヲ誅セシメント欲スト、而シテ頻々我ヲ召

ス、我疑ヒ無キヲ能ハズ、吾己ニ鎌倉公兼ト約シ、將ニ

入テ幕下ノ虐政ヲ諫ントスルナリト、中津帰リ報ズ、

義満笑テ曰ク、奴輩自カラ其強キヲ負ヒ、廼公ガ實ニ

然ラシムルヲ彼兵力益々強キハ知ラズト、乃チ自カ

ラ管領以下ノ諸將ヲ率テ出デ、東寺ニ陣ス、遂ニ

進ンデ男山ニ至ル、近畿ノ將士来リ集マル者三萬餘

僧中 津詰 弘責義



島山 滿家 斬義弘

永 忠 役

攻ム、城甚ダ堅固ナリ、義滿諸將ヲシテ戦ヒテ息ム、長  
圍ヲ築カシム、十二月ニ至ル、乃チ火ヲ四面ヨリ縱テ  
進ム、樓櫓皆倒ル、大戦良久シテ、義弘走り出シ、誤リ  
ニ管領島山基國ノ軍ニ入ル、基國ノ子滿家與ニ闘フ  
テ之ヲ斬ル、義滿乃チ紀伊ヲ滿家ニ賜フ、頼元ノ子滿  
元功アリ之ニ和泉ヲ賜フ、之ヲ應永ノ役ト謂フ、土岐  
詮直等皆平ラダ、初メ詮直ノ舅ヲ康行ト曰フ、康行ナ  
ルハ、頼康ノ子ナリ、天授中、美濃ノ守護ヲ襲フ、其弟滿  
貞京師ニ在リ、兄ノ職ヲ奪ハント欲シ、譖シテ曰ク、詮  
直反ヲ謀ル、康行之ヲ助クト、義滿滿貞及ビ從弟ノ頼

土岐 詮直 死 于 諺

義滿 滿兼 和成

益ヲ遣ハシ、往テ之ヲ討チ降ダス、康行ヲ宥シ、詮直ヲ  
逐フ、故ヲ以テ詮直遂ニ叛ニ死ス、近畿既ニ平ラダ、滿  
兼乃チ兵ヲ引テ鎌倉ニ還ル、義滿謀シテ其謀ヲ知ル、  
或ヒト因テ貞世ヲ問シテ、間ハ際ナリ、其際ヲ伺曰ク、  
貞世ノ子弟遠江ヲ留守スル者謀ニ與ル、叛ニ黨與ス、  
彼曩ニ命ヲ被リ即来ラザル者ハ此ヲ以ナリト、貞世  
惧レ走テ遠江ニ歸ル、義滿怒リテ貞世ヲ討チ、以テ滿  
兼ニ及バント欲ス、滿兼ノ執事上杉朝宗百方和ヲ講  
ズ、義滿乃チ滿兼ニ賜フニ足利ノ莊ヲ以テス、凡ソ謀  
滿兼ノニ與カル者皆釋シテ問ハズ、譴責セザ、貞世退

謀叛ニ與カル者皆釋シテ問ハズ、譴責セザ、貞世退



義満

テ藤澤相<sup>摸</sup>ニ居ル上杉憲定人ヲシテ貞世ニ謂ハシメ  
テ曰ク子ノ退居ハ適ニ以テ疑ヒヲ<sup>藤澤ハ鎌倉ニ密</sup>  
ヲ勸テ共<sup>ニ</sup>乱ヲ<sup>マナ</sup>招クニ足ルノミト、貞世乃チ遠江ニ  
作スアルヲ疑フ招クニ足ルノミト、貞世乃チ遠江ニ  
帰ル、憲定ハ憲方ノ子ナリ、己ニシテ義満其功勞<sup>今川</sup>  
ノ功ヲ思ヒ、召シテ京師ニ至リ、之ヲ待スル<sup>イサホシ</sup>初メノ  
如シ、歳ヲ踰テ卒ス、貞世頗ブル書史ニ<sup>アヒミラ</sup>涉リ、書ヲ著ハ  
シ時ノ政ヲ<sup>キセツ</sup>譏切ス、往々中ル<sup>シヨモツ</sup>トアリト云フ、初メ貞世  
ノ父範國尊氏ニ<sup>ノリクニ</sup>仕、駿河遠江ノ守護ト為ル、貞世ニ  
命ジテ襲領セシム、貞世受ケズ、兄範氏ヲシテ駿河ヲ  
領セシム、貞世ハ遠江ヲ襲フテ<sup>オイ</sup>姪ノ氏家、姪ノ孫泰範

義満 驕倨

ニ至ル、義満ノ時ニ及ンテ、乃チ駿河数郡ヲ割テ貞世  
ニ加ヘ賜フ、泰範意<sup>オモ</sup>フ貞世ノ請フ所ト、義弘ト俱ニ之  
ヲ譖ス、是ニ至テ、義満終ニ貞世ノ養子<sup>ナカアキ</sup>仲秋<sup>貞世ノ</sup>ヲ  
シテ遠江ヲ襲領セシム、細川頼元ノ故事<sup>サキ</sup>ノ<sup>頼元ヲ</sup>養  
テ子ト為シ、ノ如クス、七年、大内義弘ノ子持盛来リ降  
襲領セシム、ノ如クス、七年、大内義弘ノ子持盛来リ降  
タル、其嘗テ父ヲ諫ムルヲ以テ、之ヲ宥<sup>ユル</sup>シテ其封ノ半  
ヲ削ル、義満性豪侈ニシテ、数ク乱逆ヲ平ラギ、志益ク  
驕ル、将帥ヲ待スル<sup>ツヨクホコル</sup>ト甚ダ<sup>オゴ</sup>倨ル、朝臣、其家ニ往来スル  
者、或ハ家諫ヲ以テ之ヲ遇ス、義満髪ヲ削ル<sup>デハイリ</sup>ノ歳、<sup>二</sup>永  
叡山ニ適ク、儀式法皇ノ御幸ニ准ズ、又土木ヲ喜ビ、寶



義滿  
通好  
大明

幢相國ノ諸禪寺ヲ創ス創建定メテ五山東福、相國、建仁、天龍、萬壽  
 寺ノ五ト為ス僧録司ヲ置ク僧中津妙葩祖阿周信等皆  
 厚遇セラハル是ヨリ先キ我西南不逞ノ徒不逞ハ不  
 國ヲ侵擾ス義詮ノ時元主韓人ヲシテ來テ為メニ之快ノ如シ外  
 ヲ戢メシテ請ハシム戢ハ兵ヲ歲ムナリ戦争元亡  
 テ明興リ明主元璋モ亦數ク僧ニ託シテ來リ請フ明  
 復兵ヲ戢メ八年五月義滿私カニ祖阿ヲ遣ハシテ好主  
 ニテ明ニ通ズ參議管原秀長書ヲ草ス書辭甚ダ恭シ  
 九年明主僧道彛ヲシテ書及ビ冠服ヲ齎ラシメテ義  
 滿ヲ封ノ諸候ヲ爵スルシ日本國王ト為ス義滿之ヲ受

天皇  
幸北  
山第

ク足利氏中世ニ至ルマテ使聘往來スルニ皆王ヲ以  
 テ稱ス義滿又内嬖多シ少子義嗣ヲ生ム之ヲ愛ス義  
 持ヲ廢セント欲シテ未ダ果サズ是ヨリ先キ帝再々  
 ビ室町ノ第二幸ス十五年三月北山義滿第二幸セント  
 請フ義滿自カラ法服ヲ被テ義嗣ヲ携ヘテ奉迎ス義  
 嗣ヲ拜シテ五位左馬頭ト為ス四位少將ニ遷ル四月  
 宮中ニ冠ス儀親王ニ准ズ是ヨリ嫡庶義嗣相善カラ  
 ズ識者之ヲ譏ル然レ氏尊氏義詮ノ世ハ諸將恩ニ狃  
 レ叛服常ナシ氏清義弘誅ニ伏シテヨリ畏服セザル  
 者ナシ世稱シテ義滿ノ生ル歳ハ戊戌ナリ字皆茂



特  
2640

啓蒙日本外史

卷之十二

何不成

ニ從フ、故ニ能ク<sup>カ</sup>戈<sup>ダ</sup>戟<sup>キ</sup>ヲ以テ天下ヲ平ラグルナリト

啓蒙日本外史卷之十二終



